

自律学習を促進するためのマインドセット

—基礎ゼミナールと英語科目での実践

関 戸 冬 彦

はじめに

本稿は学習者の自律学習を促進するひとつのファクターとしてのマインドセットを紹介すると同時に、実際にそれに基づいて実施した授業実践報告を行うものである。よって最初にその根幹を成すマインドセットとは何かを簡潔に紹介、解説した後、本学法学部における基礎ゼミナールでの取り組みと英語科目での取り組みをそれぞれ紹介する。また、後者に関しては実施後にアンケート調査も行ったのでその結果と分析も合わせて報告する。

1 マインドセットとは何か

まず、マインドセットとは何かを説明する。マインドセットとは、スタンフォード大学の心理学研究者、キャロル・S・デュエックが提唱しているもので、日本では邦訳された著書、『マインドセット「やればできる！」の研究』（以下、『マインドセット』）が一番入手しやすく、参考になる。加えて、デュエック本人によるTED Talkもあり、こちらを視聴することでもマインドセットに関する大まかな趣旨は掴むことができる。ここでは前述の書籍、『マインドセット』を適宜引用しながらマインドセットとは何かについて言及する。マインドセットという語そのもの、つまり辞書的定義は「考え方」や「物の見方」という意味であるが、デュエックによるとそこにfixedとgrowthの2つのタイプがあるという。たとえば、『マイン

ドセット』第1章では「自分の能力は石版に刻まれたように固定的で変わらないと信じている人—「硬直マインドセット=fixed mindset」の人—は、自分の能力を繰り返し証明せずにはいられない。」(13)と述べられ、「[「しなやかマインドセット=growth mindset」、人間の基本的資質は努力次第で伸ばすことができるという信念だ。」(14)と上記ふたつのタイプが対比されている。訳では「硬直」と「しなやか」となっているが、これらが上述のように英語におけるfixedとgrowthという表現に相当する。そして、「うまくいかないときにこそ、粘りづよい頑張りを見せるのが「しなやかマインドセット」の特徴だ。」(14)とし、「硬直マインドセットの人は、自分が他人からどう評価されるかを気にするのに対し、しなやかマインドセットの人は、自分を向上させることに関心を向ける。」(21)とそれぞれの特徴、ならびにしなやかマインドセットを持つことの意義を明らかにする。このように、デュエックの主張はしなやかマインドセットを持つことで自分の可能性を広げることができる、あるいは自分を俯瞰的に見てたとえ何かに失敗したとしてもそこから立ち直ることができる、という部分に焦点が当てられている。とはいえ、インプットの如くそう頭で理解したからといって安易に誰しもがすぐに、そして恒久的にしなやかマインドセットでいられるわけではない。その点についてデュエックは「マインドセットを変えるのは容易なことではないが、変えたのに意味がなかったと言った人はこれまでひとりもない。」(348)と述べ、さらに「あなたが今、変わるべきときなのかどうか、それを判断するのはあなた自身だ。」(349)と読者に問いかける。そして最後に「しなやかマインドセットはどんなときもあなたのそばにいて、これから進むべき道を指し示してくれるはずだ。」(349)と結ぶ。このようなマインドセットに関する概念を机上の知識だけではなく、実際の体験と結びつけての学びを行おうと試みたのが次に報告する基礎ゼミナールでの取り組みである。

2 基礎ゼミナールでの実践

2021年度前期開講の執筆者担当基礎ゼミナール、スタートアップでは上記『マインドセット』を課題書籍に指定していた。ゼミでは授業時間内に主にふたつの活動を行っており、ひとつは毎週自分たちの行動を振り返ることでそこからの気づきや学びを得るといえば経験主義学習と、もうひとつは『マインドセット』をもとにした購読とディスカッションであった。ここでは後者について紹介する。『マインドセット』は全8章から構成されているので（Appendix 1）、最初のうちは毎授業時に1章、慣れてきたら箇所ないし紙面的分量（ページ数）によっては一度に2章のペースで読み進めた。読むことに関しては授業内である程度の時間を設け、その時間内に当日の該当箇所を読み切り、内容を要約して共有するという活動も行った。これはアクティブブックダイアログと呼ばれる手法の転用で、要は読むべき箇所を複数人で分担して読み、その要約を持ち寄ることで全体像を素早く把握するという方法である。ゼミでは全ゼミ生20名を5グループ、4人1組を5つ、のグループに分けて主にそのグループ毎で活動をしていたので、時にグループ内の2人、あるいは4人、で分担して1章分を読み切るような形をとった。それをくり返すことで前期の中間あたり、第7回授業時にて読了へと至った。なお、単に書籍を読んだだけでなく、上述のように関連する事柄や自分の経験なども合わせてそれぞれ意見交換するというのが毎授業時でのディスカッションの主な内容でもあった。読了後の第8回では書籍全体のまとめ、自分が一番関心を持った章についての理由と事例、次の行動に活かしたいこと、の三点を合計約1000字ないしそれ以上でレポートとしてまとめることとした。

ゼミ生たちがこの『マインドセット』からどのような学びを得たのかはゼミ生たち全員のレポートを読めばわかるのだが、紙面の都合上全てのものを本稿内にて紹介するわけにもいかないなので、ここにその一部のみ抜粋する。

本書より、しなやかマインドセットの持ち主は、不利な状況に置かれても、経験から吸収すべきことを自己に取り入れ、成長の糧とする。失敗を恐れて何も挑戦しない硬直マインドセットの人は、自己を進歩させることはできない。掲げた目標へとたどり着き、自己の理想を実現するためには、努力が欠かせない。私には、叶えたい夢がある。それは、珠算で最高段位十段に合格することだ。私は現在九段を取得しており、その夢まであともう一步の段階だ。幼い頃から練習を積み重ね、数々の大会や検定試験を経験してきた。珠算では、制限時間内にいかに問題を解き、正答を導いて高得点を獲得できるかというスピード力と正確性が求められる。全国大会出場の切符を手にした県大会優勝の達成感や検定合格の喜びもあれば、学業と部活動との両立の難しさに悩み、練習の成果が十分に発揮できずに落ち込んだこともあった。一歩ずつ思い描く夢を実現するためには、失敗から学び、挑戦する勇気が必要だ。だからこそ、しなやかマインドセットを強く持ち、これからも逆境に負けずに、自分の可能性を信じて毎日努力を重ねていく。⁽¹⁾

このレポートからもわかるように、学生たち、特に上記レポートを書いた学生、は自分の成し遂げたいこととマインドセットとの関連性を実感として見出せた場合、自分の努力に対する見方、また失敗したとしてもそこからどうするのか、の視点を『マインドセット』を通して得られたと言える。もちろん、全員が一樣にというわけではないが、上記レポートに関しては目標が具体的でかつ明確であることが秀逸であり、特筆に値する。

さて、『マインドセット』の中でゼミ生全体の中で一番関心が高かった章はどれだったのだろうか。先のレポートの「自分が一番関心を持った章についての理由と事例」によると、半数近くのゼミ生が第4章スポーツ―

(1) レポートを執筆したゼミ生からは本稿への転載許諾を得ている。

チャンピオンのマインドセット、を挙げていた。理由としては、実際にかつてスポーツをやっていたので親近感、興味があったというものや、名選手と言われるものたちも最初から何か特別な才能があったわけではなく並はずれた努力がそうせしめたという部分に驚きがあったというものが挙げられていた。やはり自分事として考えてみると、マインドセットそのものが机上の知識ではなく、自分たちの身の回り、あるいは生活のどこかにつながっていると意識しやすかったのだろう。

なお、ゼミでは『マインドセット』の後に『君たちはどう生きるか』を課題図書にしていた。こちらの内容と活動については本稿では割愛するが、一点、『マインドセット』と『君たちはどう生きるか』の両書籍につながりはあるのだろうかという部分にのみ触れておきたい。というのも例えば『君たちはどう生きるか』の「5、ナポレオンと四人の少年」の後に出てくる「偉大な人間とはどんな人か（おじさんのノート）」を読んでもみると、「偉人とか英雄とか言われる人々は、みんな非凡な人たちだ。普通の人以上の能力をもち、普通の人にはできないことを仕遂げた人々だ。普通の人以上だという点で、その人たちはみんな、僕たちに頭を下げさせるだけのものをちゃんともっているんだ。（『君たちはどう生きるか』、195）という部分や、あるいは「彼の奮闘的な生涯、彼の勇気、彼の決断力、それから、あの鋼鉄のような意志の強さ！…殊に、どんな困難な立場に立っても微塵も弱音を吐かず、どんなに苦しい運命に出会っても挫けなかった、その毅然たる精神には、僕たちは深く深く学ばなければならない。」（『君たちはどう生きるか』、203-204）などがあり、これらの箇所はこれまで見てきたマインドセットを彷彿とさせる。そこで、上記箇所を扱った際にゼミ生たちに「偉人ってどんな人？」と問いかけてみたところ、返ってきた答えの第一位はエジソンだった。これはとても興味深い答えであった。というのもエジソンは『マインドセット』第3章の冒頭に「彼を最終的に、その他大勢から引き離したもの — それは並はずれたマイ

ンドセットと意欲だった。機械をいじくりながら次々と新しいことに挑戦する少年の好奇心をいつまでも失わなかったのだ。」(『マインドセット』、77-78)と出てきていたからだ。この記述からも察することができるように、偉人とはしなやかマインドセットの持ち主かもしれないということを指摘し、ゼミ生内で共有された。そして、「僕たちは、自分で自分を決定する力を持っている。だから誤りを犯すこともある。しかし— 僕たちは、自分で自分を決定する力を持っている。だから、誤りから立ち直ることもできるのだ。」(『君たちはどう生きるか』、273)という部分についても、誤り、換言するならば失敗、からどう持ち直すかはしなやかマインドセット的であるし、むしろこの部分こそがしなやかマインドセットを体現している言説であろうとも指摘した。よってこうした部分において、『マインドセット』と『君たちはどう生きるか』との間に共通点を見出せたわけである。これに関しては、最初からこちらが想定していたわけではなく、図らずもそうなったところがなんと奇遇ではあるものの、結果として両書籍を選定した意味づけがより明確になった。

3 英語科目での実践—マインドセットを英語授業に転用した事例

基礎ゼミナールと英語科目とでは授業の内容そのもの、あるいは趣、がかなり異なるがマインドセット的アプローチ、すなわちしなやかマインドセット的なスタンス、を英語科目、具体的にはReading IA、総合英語Aにも取り入れてみた。これらの科目は英語科目なので、上記基礎ゼミナールのように『マインドセット』をテキストにしたわけではない。その代わり、やればできるという感覚を持ち、受け身的ではなく自律的に英語を学習していく習慣を身につけてほしかったのでそのエッセンスを継承し、自律学習のプログラムを組み入れることを試みた。その背景には、学習者が「できる」「できた」とそのプロセスを認められるような学習スタイルを作りたいという想いと、なるべく「同じことを一斉にやれ」というトップダウン

的な、いわば強制的なアプローチではなく各自がやりたいと自ら思うことをやれるような環境作り、さらにはそれを可視化してかつ自分だけでなく学習者同士が学び合えるシステムの構築への必要性を感じているところがあった。

そして上記を実現させるために、具体的には以下の方法を取り入れたので次の項で詳しく報告する。なお、ツールとしてはTeamsを活用した。

- 1 毎週の学習項目を自分で決め、（【目標】、【学習計画】）、それを各授業の終わりに決めて宣言する
- 2 実施してみてどうだったか、うまくいったかどうか、効果があったかどうかを自分で検証する（【実施内容】、【気づき・発見】）
- 3 それを次の授業の冒頭で報告/確認

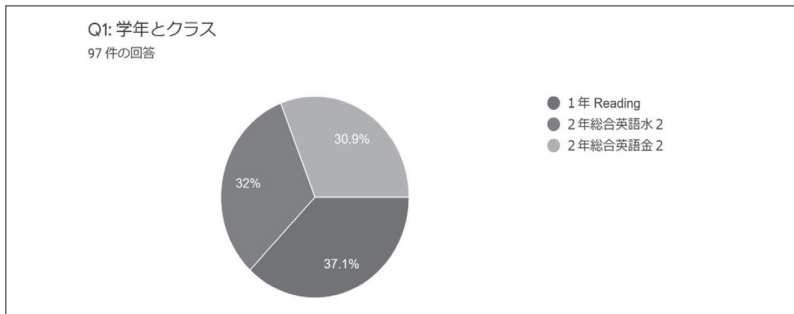
3.1 実施方法

まず、Reading IA、総合英語A（水曜2限、金曜2限）の計3クラスそれぞれにTeamsを利用してのクラス用チームを作った。これは昨年度来、執筆者の担当授業ではどの授業においても行っていることだが、今回はそこに基本4人1組のチームスレッドを作った。このチームは教室内のチームと同じであり、実際の教室内でも同じ4人のメンバーで座って活動などを行っている。それぞれには各々がつけたチーム名があるので、その名前をスレッド名にし、Teams内に作った。つまり、Teams内には各回の授業用コメントのためのスレッドと、チーム毎のスレッドが同居していることになる（Appendix 2）。このチーム毎のスレッドに、毎週授業内の最後にその週に自分で英語に関して学習したい項目を書き込み、授業後から次の授業までの日々実践、そして次の授業が始まる前までに行った結果への気づきや発見も記入する。そしてこれを毎週授業開始時に、その週何をやったのか、やってみてどうだったのか、に関してチーム内のメンバーとあたかもピアコーチングのように報告しあう。また、上述したよう

にその授業の最後にはまた次回までに何をするかをその場で記入しTeamsのスレッドに投稿、かつメンバーにここでもコーチング的アプローチで書き込んだ内容を実施すると相互に宣言してもらう。記入する言語は日本語、英語、いずれでも構わず、自分がやりたい、あるいはやりやすいほうでよいとした。結果、どちらの言語スタイルも見受けられた。なお、サンプルとしてこちらから雛型のようなものは予め提示しておいた(Appendix 3)。この一連の活動をくり返すことで自律的な英語学習習慣の定着を図ると同時に、どういう学習法が自分にとって効果があるのか、あるいは自分は楽しいと思って継続することが出来るのか、に気づいていけるところを狙いとした。つまり、前述の1～3を週単位で周期的に稼働させたわけである。

3.2 アンケート

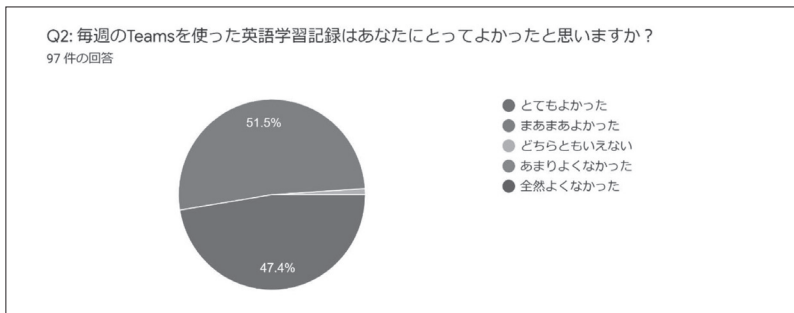
ではこのような活動を学習者たちはどう思っていたのだろうか。前期最終授業時に共通のアンケート(Google Formを使用)を行ったのでその結果と分析を以下に記す。



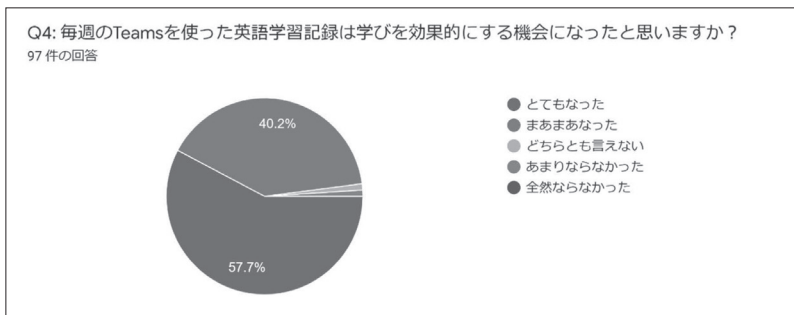
まず、回答者数は以下の通りであった。各クラス37～40名の人数構成だったので対象人数は凡そ120名弱、そのうちの回答数は全97件であった。この件数を各々の割合で計算すると、1年生のほうがやや高い割合だが概ね各クラスの回答率は80%強、すなわち30名強だったことになる。

そして最初の質問、この英語学習記録は自分にとってよかったか、という総評的な問いに対する回答は、とてもよかった、まあまあよかった、がそれぞれ5割程度だったので、この学習記録という活動を導入したこと自体、そして実際に行ったことに対する評価は全体として高かったと言える。なお、以下各項目の番号は2、4のように偶数のみになるが、これは間の奇数番号が自由回答記述欄であったためである。自由回答に関しては適宜、例として取り上げる。

この項目に関する自由記述回答としては、「自分で“こんな事をやるよ”と宣言することで使命感が出たり、やることが決まっているので後はやるだけという場面が作り出されるから。」、「自分の学習状況を文字に起こして振り返ることはやっていそうで、やっていなかったことだったので、とても良い学習方法であると感じたから」、「自分が実施した内容を記録しておくことで、後で振り返ってみた時に達成感を味わえ、さらに学習をしようというモチベーションになったから」、「毎日英語に触れる習慣がつくようになったことと、他の人がどんな勉強をしているのか知ることができたから」など、自分への刺激、習慣化につながったという主旨のコメントと、自分以外のメンバー、クラスメイトがどんな学びをしているのかを知る機会になり、それが刺激となったというコメントが目立った。特に後者の、自分以外の学び方を知る機会となったというのは、Teamsを使った意義でもあるし、それを肯定的な経験として捉えてもらえたところは嬉しい。

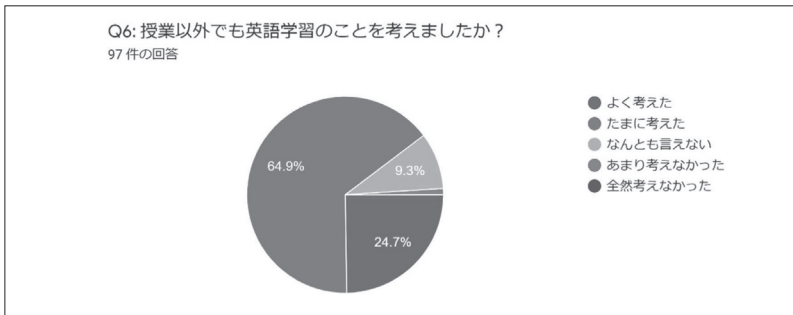


次に、学びを効果的にする機会になったかどうかについては、とてもなった、が60%弱、まあまあなった、が40%だったので、ほとんどの学習者は効果的な機会だったと捉えていることがわかる。自由記述回答では、「事前に学習計画を立てておくことで、なにをすればよいかを明確にでき、すぐに実行することができたので、効率的であったから」、「自分が何をしたのかをすぐ見れるので分かりやすく、次はこうしてみようという工夫を考える事ができた」、「学習記録をつけることによって、今までやった事やこれからやる事が分かり、自分が出来なかったことや出来たことが一目見て分かりやすかったから」などがあり、自分で計画したものがすぐに可視化できるところにあり、かつそれを客観的に見ることで次への学習、学習意欲につながったという部分においては、記録をつけるという活動そのものが効果的な機会のひとつであったと言えるだろう。



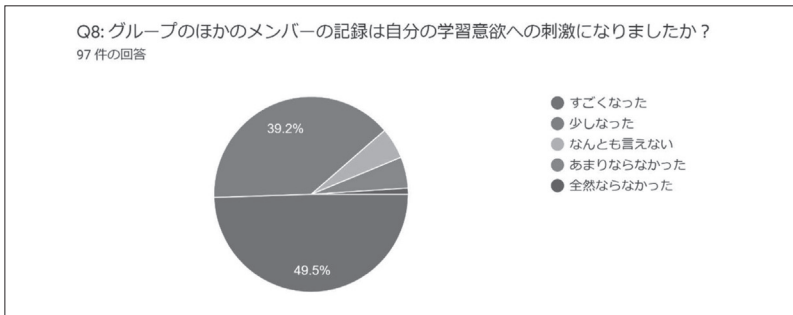
授業以外でも英語学習のことを考えたか、に関してはよく考えた、が全体の約4分の1、たまに考えた、が65%弱、なんとも言えない、は10%未満であった。この活動自体がそもそも授業時間以外での自律学習の習慣づけであったので、回答としては妥当であろうし、狙いは達成されたと言ってもよいだろう。自由記述回答では、「勉強方法を変えることで、身近なものでも英語の勉強になることに気づいたから」、「毎日英語を勉強するという計画を立てたので、1日のうち必ず英語のことを考える機会があったから」、「映画を字幕付きで見てみたり、今まではただ洋楽を聞いて

いただけだったけど、この単語はどう言う意味があるのか、この歌詞の訳は何なのかを考えることが出来たから」などの回答があった。ほかにも映画や音楽を通して英語に触れる機会が増えたという主旨のコメントも多く、逆にいうとこれまではそうしたものが英語学習になるとは気づいていなかった、意識していなかった、ということなのかもしれない。そういう点では、自分の学習内容は自分で決める、かつそれを習慣化する、ということが浸透していく中で、身近なもの、自分の興味あるものを通して英語が学べるという感覚が付き、かつそれをこのアンケートでより意識してくれた可能性もあるだろう。



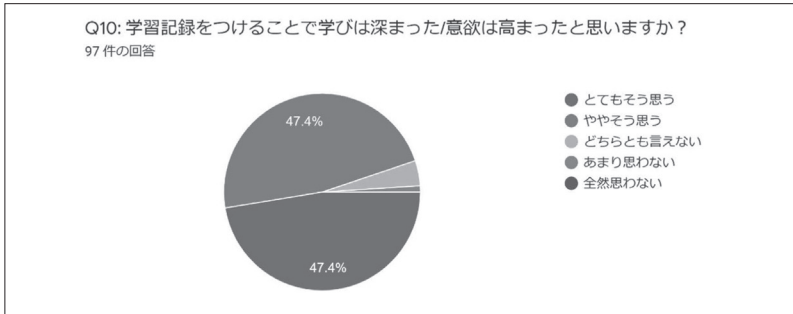
さらに、ほかのメンバーの記録は学習意欲への刺激になったか、に関しては約半数がすごくなった、と回答している。また、40%弱が少しなった、としているので凡そ90%の回答者は刺激になった、と考えてよい。それ以外の10%については何らかの事由があったと思われるので、そこは自由回答記述で見てみることにする。すごくなった、少しなった、への回答と思われるものは、「自分がやる気が出てこない時に他の人の記録を見ることでやる気を回復させたりすることがあったから。」、「他の人は自分以上にたくさんの努力をしているということが自分もやらないと、という意欲に繋がった。」、「自分の考えつかないようなことを書いていたりしていたため」、「他の人が取り組んでいる目標を参考にもできたしみんながやっているなら自分も頑張ろうという気持ちを保てたから」、「メンバーが

どのような英語学習をしているかを確認しつつ取り入れることができたから」などのように誰かの学習への取り組みを目にすることで自分への刺激となったことが見て取れる。やはりこれもTeamsならではの機能で起こせた部分も大きい。なお、あまりならなかった、という理由としては「少し、メンバーの英語に対する学習意欲が自分よりも少ないようにおもえたので物足りなさを感じたから」のようなものもあり、これはグループのメンバーの取り組みにもよるのかもしれないが、逆に意欲を殺がれるようなことがあるとそれは残念なことになってしまうので注意が必要なところでもある。

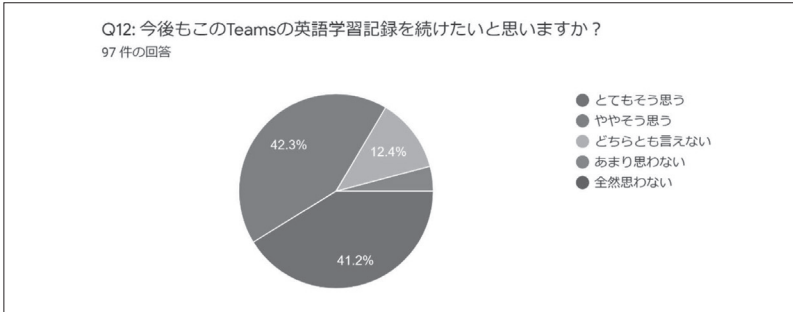


記録をつけることで学びや意欲は向上したか、についてはとてもそう思う、ややそう思うがどちらも約48%だったので、ほぼ記録をつけることで学びや意欲の向上は学習者の中で結びついていると考えてよい。自由回答記述では、「元々学習計画を付けることが好きだったので、発見などは考えていなかった自分の1週間の学習計画でその部分も考えるようになったことで学ぶことが深まりました」、「学習記録をつけることで、自分でできることが増えたり、学んだことを覚えていたりすると向上心が上がるのでよかった」、「記録をつけると「勉強しなきゃ」という意識が生まれ、自然と英語を勉強したいと思えるようになったから」、「学んだことを言葉にして残しておくことで、今の自分には何ができて何ができないのかが明確になる」などのように、自分の書いたことを自分で目にすると

うことでそこに何らかの刺激や意欲、あるいは自分をメタ認知するような視点が生まれ、結果としてそれがよい方向に働いたように思える。



最後に、今後も続けたいかどうかについては、とてもそう思う、が40%強、ややそう思うも同じく40%強、だったので8割以上は続けたいと思っていると判断できる。逆にどちらとも言えない、は10%強であった。自由回答記述を見てみると、「言葉として残すことで、自分の現状を客観的に見ることができ、また同じクラスの仲間たちからも刺激を得ることができるため」、「紙に書いた記録などは、なくしてしまう恐れがあるが、Teamsを使えばなくすことなく記録を見返すことが出来るため」などのコメントがあり、記録をつけること自体に有意義な点を見出している部分と、Teamsという手段が手軽でアクセスがよいという部分があるように思えた。むしろ、両者がうまく連携しているところがこの取り組みの最大のメリットなのかもしれない。逆に、「授業の復習はできるが授業が終わった後に記録するのは少しめんどくさいと思った」とのコメントもあり、これは個人の感じ方次第では向き、不向きなところもあるのだろう。



これらの結果からTeamsを用いた英語学習記録活動は概ね学習者にとって好ましく、また効果が自分たちでも実感できる活動となったと言える。それは換言すれば、学習者たちの中に自律的な英語学習の習慣が根付き始めたことでもある。

とはいえ、問題点や課題がまったくないわけではない。以下、それらの点について考察する。まず、これは学習者個々のTeamsへの感覚かもしれないが、「パソコンからだ使いやすいけどスマホからだ使いづらかったから」というコメントがあり、こちらからはスマホ利用を推奨していたわけではないのだが、授業時にパソコンを携帯していない場合は結果スマホ利用になるわけで、その時点でのことを言っているのだろう。確かにパソコンとスマホとでは見え方が違う部分があるので、これはパソコンを持ってきてもらうか、あるいはスマホに慣れてもらうか、するしかない。つぎに、「他の勉強で忙しくて、出来なかったなどの理由がある」というコメントがあり、出来なかったという感覚で終わってしまうとそれは負の感情となってしまうので、普段から「出来なかったことではなく出来たことに着目して書いて」とは伝えていたのだが、記録することそれ自体を忘れてしまうと如何ともしがたいので、その点は次回には出来るはずと肯定的なフィードバックをかけ続ける必要はある。

上記のような若干の課題はあるものの、活動そのものはこれまで記してきたように、その意義は見いだせたはずだ。なお、授業全般へのコメント

の中には「英語の授業を楽しいと思ったのは、人生で初めての経験でした。人にやらされる学習ではなく、自分から進んで行う学習の面白さと、その重要性を感じることができました」、「この英語の授業では英語だけでなく、学び方や取り組み方まで学ぶことができました」、「授業外でも英語に触れる機会が得られたことが1番自分にとって良い環境だったと思います。これからも継続していきたいです」、といったものもあり、こうした学習者の今後の取り組みが楽しみでもある。総じて言うならば、この活動を通して各自が「やればできる」という感覚を身につけ、継続的に学習していったなら、それこそまさに自律学習者へと踏み出せたことになるのだろう。

おわりに

上記のように、本稿ではまずマインドセットとは何かを書籍『マインドセット』に沿って説明し、その後基礎ゼミナールでの取り組みを報告した。そしてマインドセットの根幹である、自分ではできるという気持ちを活かした英語科目における自律的学習習慣の確立を目指したTeamsでの学習記録を報告した。アンケート結果とその分析からもわかるように、この取り組み自体は概ね好評に受け止めてもらえたところがあるので、今後も継続的に、かつより自律的に英語学習に取り組み、かつ各自が納得するような結果が得られるよう尽力していきたい。最後に、授業に参加してくれた基礎ゼミナールスタートアップの履修者、また各英語科目の履修者に感謝の意を記して結びとする。

参考文献

- キャロル・S・デュエック、『マインドセット「やればできる！」の研究』、今西康子訳、草思社、2016年。
吉野源三郎、『君たちはどう生きるか』、マガジンハウス、2017年。

Appendix 1

- 第1章 マインドセットとは何か
- 第2章 マインドセットでここまで違う
- 第3章 能力の実績のウソホント
- 第4章 スポーツチャンピオンのマインドセット
- 第5章 ビジネスマインドセットとリーダーシップ
- 第6章 つきあい一人関係のマインドセット
- 第7章 教育マインドセットを培う
- 第8章 マインドセットをしなやかにしよう

Appendix 2

2021 総合英語A金2

一般

Cherry Blossom Viewing Party

Dr. Yellow

earth color

FC Oyama

Gyoza

HK

Kamome Shokudou

Koujoushin

REIMEI

第10回授業 6月18日

第11回授業 6月25日

第12回授業 7月2日

第13回授業 7月9日

Appendix 3

日本語版

【目標】

今週は～のチカラをつけてみたい。

【学習計画】

○曜日：。。。

○曜日：。。。

【実施内容】

○○というアーティストの○○という曲を聞いて、歌詞の「○○」という部分を発音して/歌って
みた。/ 映画○○を見て、セリフの英語と字幕を比較してみた。

【気づき・発見】

やってみたところ、○○のチカラがついたようだ。逆に、○○はもう少し続けてみたい。

English version

【目標】

In this week, I would like to improve ... ability.

【学習計画】

Thursday: ...

Friday: ...

【実施内容】

I listened to the song, "...", performed by ..., and sang together with the audio file.

I watched the movie, "...", and compared the Japanese subtitle to English

【気づき・発見】

After doing above, my ... ability might be improved. I also would like to continue to ...

(本学法学部准教授)